思い出

糟谷憲一

にいがた県民教育研究所四〇周年おめでとうございます。

私は一九八二年四月から九五年四月まで、新潟大学人文学部に在職していました。一九八六年から八八年まで、日本科学者会議新潟支部の事務局長をつとめておりましたが、にいがた県民教育研究所の木村隆利、八木三男先生をはじめ、諸先生に科学者会議に入会をお願いし、研究所に科学者会議の班をつくっていただきました。そのときに、お願いするだけでは申し訳ありませんので、一緒にお願いに伺ったS先生とともに、にいがた県民教育研究所の会員となりました。それ以来、多くの時期は、『にいがたの教育情報』からいくつかの論稿を拝読するだけの、あまり熱心ではない会員として過ごしてきました。

現在、日本の教育は、小学校から大学・大学院まで、たいへん危機的状況にあると思います。その危機のさまは、地域・学校ごとに異なっていますので、一つ一つ細かく分析して対処し、克服する営みを粘り強く続けていくことが大切だと思います。にいがた県民教育研究所が、新潟県の教育におけるさまざまな問題を批判的に分析する成果を積み重ねてこられたことは、とても貴重なものであったと思います。この事業がさらに長く継続されますよう切望いたします。

私は、一九九五年に東京の一橋大学に転勤しましたが、すぐに歴史学関係の学会の役員を務めることになり、二〇〇一年には国立大学・高専の職員組合の連合体である全国大学高専教職員組合（全大教）の中央執行委員長に「ヒョウタンからコマ」のような経緯で就任し、二〇〇三年の「国立大学法人法」案反対闘争に奮闘するという体験をいたしました。私の専門研究は、朝鮮の近世・近代史ですが、こちらの方は牛の歩みのようです。ただ、朝鮮の近世・近代史について多くの方に知っていただきたいという願いから、通史の執筆に力を入れてきました。山川出版社から刊行された『朝鮮の近代』（世界史リブレット）、『世界各国史　朝鮮史』『朝鮮現代史』『世界歴史大系朝鮮史』（この三

点は共著）、新日本出版社から刊行された『朝鮮半島を日本が領土とした時代』などです。歴史教育の場で朝鮮史の扱いがもっと大きくなるとよいなと思っていますが、以上の著書、とくに最後のものを読んでいただけますと幸いです。

（かすやけんいち・東京都）

思い出されることなど

熊谷きい

クーラーが停止して寝苦しかったのだろうか。トイレに起きてから目がさえてしまった。頭の中はまた、子供のころのことが次々と思い出されるのだ。

一九四一年一月生まれだから小学校入学は一九四七年である。新学制（6・3制）によって四月、三条小学校一年生となったのである。木造の二階建て校舎の隅々まで眼に浮かぶ。

卒業式が近づくと始まるのが、運動場での「君が代」の練習。男先生が壇上に上がり指揮された。決まって言われる、「さされいしのいわおとなりてのところ・・・」のところ。〝さされ〟と〝いしの〟のところで息をつくな。多分一年生のときにはまだ運動場に並んでという練習はなかったのではないか。三年生くらいだったのかもしれない。

〝君が代〟を歌ったということを不思議だと思うようになったのは実は、ずっと後のことで、自分が新学制の最初だったのだと知ったのも、その後になる。

私は三条小学校のすぐ近くに生まれた。兄弟が多く、私は五女。なんでもひとりではできない子どもだったと、今は思う。長姉は私とは十一才離れており、女学校を出てから家に居て、家のことは何でもやってくれていたから、母親のようだった。学校の勉強を見てくれてるのも姉、何をしても最後の仕上げは見てもらっていたように思う。明治生まれの父は私が小学校二年の冬病死。大正十二年生まれの長兄はすでに社会人になっていたが、母はいつも家計のために針仕事。姉は本当は教師になりたかったのだと後に聞いたことがある。

でも父が、女は女学校までと許さなかったらしい。